

会議録

令和5年度第2回 とよた森づくり委員会

日時：令和5年10月27日（金）午後1時00分～午後4時30分

場所：木瀬及び^{わちばら}月原市有林、森林会館

出席者、資料：別紙

1 現地視察

- 意見（横井委員）
 - ・ ヒノキ林内の上層と下層にクリが混在しているが、上層のクリは、間伐前から上層に存在していたと考えられ、間伐後に上層まで伸長したわけではない。
 - ・ 下層のコナラは、しばらくしたら枯死すると思われる。
 - ・ そこで、下層のコナラを上層木にする場合は、多くの上層木のヒノキを伐採する必要がある。
 - ・ 検討すべきこととして、より多くのヒノキを伐採して針広混交林を目指すのか、もしくは針葉樹林のままとするのか、である。
- 質問（片桐委員）
 - ・ 針広混交林のメリットは何か。
- 回答（横井委員）
 - ・ 針葉樹林の下層に広葉樹が混交することにより、雨滴による土壌侵食の軽減に役立つ。
 - ・ 技術的に見ると、針葉樹林の下層に広葉樹を混交させることは可能。上層で混交させることは困難。
 - ・ なお、土壌の緊縛力は針葉樹と広葉樹で大きな差はない。

2 会長・副会長の選出

- 会長は横井委員、副会長は片桐委員（前期と同様）。

3 意見交換

【健全な人工林の評価指標について】（資料1）

- 説明（森林課杉本、小山）
 - ・ 市は人工林の健全化を目指して間伐を行ってきた結果、健全化の指標である立木密度 1,000 本/ha には到達できる見込み。
 - ・ 人工林の健全化の後、その状態を維持していくために、市として、間伐をさらに進めていく必要があるのかどうか、ある場合はどこまで間伐すべきか、検討していきたい。
 - ・ 検討期限は、「豊田市 100 年の森づくり構想（以下、構想）」がリニューアルされる 5 年後までである。
- 意見（蔵治委員）
 - ・ どこまで間伐すべきかを話し合う前に、まずは 5 年後に策定する次期構想の方向性について、すなわち豊田市の森林に何を求めるのかを話し合わなければならない。
 - ・ 15 年前に策定した構想、および 5 年前にリニューアルした構想では、森林の公益的機能の発揮を目指すという方向性であった。
 - ・ 5 年後の構想で方向性を変更するのであれば、どこまで間伐すべきかという目標も変わってくる。したがって、まずは方向性について議論すべきである。
- 質問（横井会長）
 - ・ 蔵治委員の意見も踏まえつつ、構想をリニューアルする今後 5 年間において、森林課が当委員会で話し合いたいことを説明してほしい。
- 回答（森林課杉本）
 - ・ 方向性としては、委員会の議論を踏まえて決めていくことではあるが、引き続き森林のもつ公益的機能の高度な発揮を目指していく。
 - ・ 話し合いたいこととして、人工林の健全化（立木密度 1,000 本/ha）後における、持続可能な森づくりの仕組みづくりについてである。
 - ・ なぜなら、健全性を維持していくためには、さらに間伐を続けていく必要があるものの、今と同じやり方で間伐を進めていくのは資源（人と金）の観点から持続可能ではないためである。
- 意見と質問（横井会長）
 - ・ 1,000 本/ha が健全というのは、ある一定の時間断面のものであり、時間の経過とともに 1,000 本/ha の意味合いも移り変わっていくと思われる。
 - ・ 今後、どのような森林にしていくべきか、本日の現地視察も踏まえて、各委

員の感想を聞きたい。

- 意見（岡本委員）
 - ・ 現地視察した市有林は、地表面が荒れているものの、下層が発達しており、適切な森になっていると思う。
 - ・ 今後は場所に応じて、適切な林型を考えていく必要があると思う。
- 意見（蔵治委員）
 - ・ 将来にわたって、森林の公益的機能の更なるプラスを目指す、もしくはマイナスに戻さないことが重要であり、この観点から森づくりを考える必要がある。
 - ・ 豊田市ではこれからも公益的機能の発揮を重視した取組を続けていくということであり、森づくりの方向性に大きな変更がないものと感じた。
 - ・ 今後の森づくりとして、どのような本数が良いのかという細かいところはまだ決まってはいるが、少なくとも100年生の人工林で1,000本/haというわけにはいかないと思う。
- 意見（富永委員）
 - ・ 現地視察の結果、1,000本/haでも十分に明るいと感じた。
 - ・ とくに私有林では間伐の早期実行をお願いしたい。なぜなら、私有林では所有者の所在や境界が今よりも分からなくなり、間伐しにくくなると予想されるためである。
- 意見（西垣委員）
 - ・ 今まで100年生を超える多くの山を見てきたが、100年生で1,000本/haの人工林は感覚的には適切ではないように思う。
- 意見（水嶋委員）
 - ・ 山を自然な形に戻すのが良いと思うが、自然な形とは何か、本当に自然な形に戻すことができるのか、について明らかにしなければならない。
 - ・ そして可能であれば、奥山は自然な形に戻し、道に近いところは木材利用するように分けて考えていくのが良いと思う。
 - ・ また、条例の4つの基本理念はこのままが良い。
- 意見（古橋委員）
 - ・ どのような森林にすべきかは、学術的、行政的および所有者目線でそれぞれ異なっており、この3者のバランスをとるのは難しいと思われる。

- ・ 所有者にとって、公益的機能が発揮できた森林にどんなメリットがあるのか、森林経営が成り立つのか、という点に疑問が残る。
 - ・ 最終的な森づくりの決定者は所有者であることから、防災的に不適であっても、儲かるのであれば森林を伐採するというケースもありうる。
 - ・ したがって、学術、行政および所有者の3者が納得の得られる森づくりを考えることが必要である。
- 意見（藤富委員）
 - ・ 現地視察の結果、1,000本/haは思ったより明るい。
 - ・ 溪流沿いの木も多くあったが、これらは太く、高い。そして溪流沿いは土壌が侵食されやすいことから、これらの立木は流木の発生源となりやすい。太く、高い木が流木になったら危険である。
 - ・ このようなところを優先して対策をしていってほしい。
 - 意見（樋口委員）
 - ・ 人が見たときに、きれいだと感じる森が良い場合もあると思う。
 - ・ 針広混交林は素材生産に向かない。
 - ・ さまざまな所有者に納得してもらえるように、目指す森の姿を何種類か用意しておくと思う。
 - 意見（片桐会長）
 - ・ これまで市は手入れが放置された人工林の整備を主として行ってきた。今後も所有者の中で、主体的に手入れを行う人は少ないと予想されることから、しばらく手入れを放置しても問題ない状態まで、行政として間伐してほしい。
 - ・ また、これまで針葉樹人工林の議論が中心であったが、市内に多く分布する広葉樹林についても議論してほしい。
 - 意見（横井会長）
 - ・ 現地視察した市有林のうち、月原市有林はもう1回間伐した方が良いと思う。
 - ・ 理由として、樹冠が閉鎖していること、ヒノキ林であるため、下層植生が繁茂しにくいこと、林齢が若く、間伐の効果が高いこと（低い枝下高を維持できる）による。
 - ・ 立木密度1,000本/haは緊急的に行ってきた対策のゴールであり、ここからが本当のスタートラインである。
 - ・ 今後は防災または木材生産上重要な森林に分けて考えていくべきである。

- ・ そのためにも、防災上重要な場所をマッピングするかどうかはさておき、防災上重要な場所の考え方について具体的に示すことが必要である。
- ・ そして、このような場所については、市が所有者の意向を踏まえながら、森林整備の具体的な方針を立てる必要があると思われる。
- 意見（森林課杉本）
 - ・ これまで行ってきた立木密度 1,000 本/ha を目指した間伐というのは、いわば森づくりの「下塗り」のようなものである。
 - ・ 今後は今のやり方に区切りをつけて、「細かく色を塗っていく」作業、すなわち森林の状況に応じて、間伐などを行っていく段階に移行していかなければならない。
 - ・ 資源（人や金）が限られている中、100 点満点の施策はない。様々な打ち手がある中で、何を重点的にやっていくのか考えるのが次期構想に向けての課題と考える。

4 連絡事項

- とよた森づくり月間のアナウンス
- 会議録を後日送付しますので、確認をお願いします。
- 次回は2月を予定。
 - 内容は、今後の森林管理の在り方について。
 - 森林所有者に今後の森林管理についてアンケートを答えてもらったので、この結果も踏まえつつ議論したい。